

題目：理学療法士養成課程における学内生活および実習時の不安について -身体的・精神的健康度の異なる学生の比較-

保健医療学専攻・理学療法学分野・基礎理学療法領域

氏名：青柳 達也

キーワード：理学療法学科学生 身体的・精神的健康 大学生活不安 臨床実習

【研究の背景と目的】

近年、大学に入学する学生の中に、精神的に何らかの問題を抱えた学生が在籍し、その数が増加していると報告されている。理学療法養成課程でも学校数の増加による学生数の増加により、精神的に問題を抱えた学生が一定数存在する可能性が予測される。

大学生活における不安は、対人関係の不安、成績に関する不安などが挙げられる。理学療法士養成課程は、必修科目が多く、科目選択の自由度が低いことに加え、学外実習(臨床実習)の単位取得が必須とされており、留年の可能性があるなど不安を助長する要素が多いと考えられる。不安は、同様の環境下で同様な刺激を受けても個々で異なるため、理学療法士養成課程の中で不安を感じやすい要因を調査する必要があると考える。本研究では、精神的な問題を抱える理学療法学科学生に対する支援方策を考案する一助とすることを目的に、理学療法学科学生の不安障害の有無と学内生活および臨床実習における不安について調査した。

【方法】

各研究において、Conerll Medical Index（以下;CMI 健康調査票）を用い、対象者を精神的安定群と不安障害傾向群に分類し、学内・臨床実習における不安について比較した。

研究 1 学内生活における大学生活不安の要因と経時的変化について

対象：理学療法学科 1 学年 73 名(男性：36 名，女性：37 名)(精神的安定群：54 名，不安障害傾向群：19 名)

方法：集合調査法にて、大学生活不安 (College Life Anxiety Scale 以下;CLAS) 調査を 1 年次 10 月，2 年次 10 月，3 年次 6 月の計 3 回実施し，下位尺度毎の合計得点を算出した。各学年における大学生活不安を検討するため，CLAS 下位尺度の群間比較を行った。また，群間比較において有意差を認めた下位尺度について，身体的・精神的健康度と回答頻度の関係を見るために χ^2 検定を実施した。さらに各群の大学生活不安の経時的変化を検討するため，群内比較を行った。

研究 2 理学療法学科学生の臨床実習（評価実習）における不安について

対象：理学療法学科 3 年次生 70 名(男性：40 名，女性：30 名)(精神的安定群：43 名，不安障害傾向群：27 名)

方法：集合調査法にて、CLAS 調査を評価実習前後に実施し、下位尺度毎の合計得点を算出した。評価実習前および実習後の大学生不安を検討するため、評価実習前・後で CLAS 下位尺度の群間比較を行った。また、各群の大学生活不安の変化を検討するため、群内比較を行った。さらに、群間・群内比較において、有意差を認めた下位尺度について精神的健康度と回答頻度の関係をみるために χ^2 検定を実施した。

研究 3 理学療法学科学生が抱く臨床実習に対する不安要因について

対象：理学療法学科 4 年次生 60 名(男性：42 名,女性：18 名)(安定群：40 名,不安定群：20 名)

方法：臨床実習前後に、臨床実習に対する不安要因を問う質問紙（以下,実習不安調査票）を実施し、2 群間の回答頻度の関係をみるために χ^2 検定を実施した。

【倫理上の配慮】

本研究は国際医療福祉大学研究倫理審査委員会（承認番号：19-Ig-89）と所属大学倫理審査委員会（承認番号：18068 号）の承認を得た上で実施した。

【結果】

研究 1：群間比較では、日常生活不安、評価不安は全ての学年で差を認め、不安障害傾向群が高値を示した。大学不適応は、2 年次のみ不安障害傾向群が有意に高値を示した。群内比較では、2 群ともに 3 年間で、全ての下位尺度で差が認められなかった。

研究 2：群間比較では、評価実習前および実習後で不安障害傾向群が、全ての下位尺度で有意に高値を示した。群内比較では、不安障害傾向群の評価不安に差を認め、評価実習後に有意に高値を示した。

研究 3： χ^2 検定の結果、実習前後で不安障害傾向群が身体的・精神的な自覚症状や実習先のスタッフとの対人関係に関する不安を強く抱いていた。

【考察】

研究 1 の結果から、学内生活では不安障害傾向群は 1 年次から大学の日常生活の中で教員や友人との対人関係、単位取得やテストなど成績に対して、不安を強く抱く傾向があり、学生が打ち解けやすい環境づくりをする必要があると考えた。また、実技試験など他者の前で行う課題については、過度に不安を抱かせないように対策を講じる必要があると考えた。

研究 2 の結果から不安障害傾向群の学生は臨床実習を経験することで、自らの学力や能力に自信が持てない状況となり、不安を強く抱く傾向が明らかになった。このことから、実習中の状況を調査し、不安を引き起こす原因を探り、対策をしていくことが必要であると考えた。

研究 3 の結果から、CCS 形式の実習は、学生が指導者との人間関係を構築することに役立つ、不安を減少させる要因であることが考えられた。一方で、患者やその他のスタッフとの関わりに対する不安は継続していたことから、緊張状態が続き、身体的、精神的な症状を生じる可能性があると考えた。

【結語】

理学療法士養成課程において、学内生活では、教員や友人などの対人関係や成績など評価に対する不安を抱く傾向がみられ、臨床実習では、患者や指導者以外のスタッフとの対人関係に対する不安を抱く傾向が明らかになった。